日経新聞の積水ハウス「会長解任」記事に、副会長が大反論！

クーデターか、自発的辞任か
積水ハウスにおける醜いドラマ
有力会長の解任劇を分析する

大手住宅メーカーの積水ハウスでクーデター騒ぎが勃発した。

舞台となったのは、1月24日に開催された取締役会。ここで和田勇会長（76歳、現相談役）が阿部俊則社長（66歳、現会長）に退任を迫ったところ、むしろ返り討ちにあって、和田会長が辞任させられる人事抗争劇が起きたというのである。

一報をスクープした日本経済新聞によれば、午後2時から始まった取締役会では和田会長が阿部社長の退任案を提示。阿部社長を除く10人の取締役で決議をしたところ、5対5という真っ二つに割れた。

だが、積水ハウスの定款では、〈取締役会の決議は、取締役の過半数が出席し、出席取締役の過半数をもって行う〉とされているため、提案は流れた。

この日の取締役会に副社長として出席していた稲垣士郎氏（67歳、現副会長）は兵庫県宝塚市の自宅前で取材に応じて、「会長からそうした提案があったことはその通りです」と認めた。

一方、取締役会はそこから急転直下。今度は社長から会長の解任案が提案されたところ、和田会長を除く10人の取締役による賛否は6対4。

返り討ちにあった形で和田会長が辞任して相談役に退くことになり、新たに仲井嘉浩常務執行役員（52歳）が社長に就任する役員人事が決定したというのだ。

和田氏はこうした一部始終について日経新聞のインタビューに応じ、「阿部氏から私の解任を求める緊急動議が出た。

理由はよくわからなかったが『ワンマンだから』ということのようで、6対4で負けた」「クーデターを起こしたという感じだ」と答えている。

しかし、前出・稲垣氏は「解任というのは事実と異なる」として真っ向から反論するのだ。

「日経新聞にはすでに抗議しましたが、『解任』という事実はありません。会長みずからが次の世代に譲るということで、『辞任』を申し出られたのです」

——解任動議はなかったということですか。

「決議されてないもん」

——決議した、しないにかかわらず、解任動議はあったのかどうかを知りたい。

「それは守秘義務があって言えません。言えませんでしたらあったと思うでしょうけれども、そんなことに答える義務はない。

取締役会として辞任を受理したというのは事実です。途中の過程は話せませんが、最後は会長がわかった、と。次の世代に譲ることが必要なんやなということを知りはったということです」

——和田氏自身が日経新聞に答えているが。

「いやいや、会長はお酒も好きだし。どういうタイミングで記者に聞かれたのか。なんであのような話をされたのかは、僕に聞かれてもわかりません」

稲垣氏はこのようにあくまで「自発的辞任」であったと火消しに回るのだが、日本を代表する巨大ハウスメーカーの「奥の院」がドロドロしてきたことは間違いない。

ここまで支えた俺を切るのか
じつはその伏線は昨秋からあった。

「このままでは会社はもたないな」

積水ハウス関係者によれば、和田会長がそんなことを言い出したのは昨年 10 月ごろからだっ

たという。

この当時、和田会長の悩みの種になっていたのが東京・五反田の土地取引をめぐる問題。

積水ハウスは昨年4月に約2000平方メートルの土地の売買契約を締結したのだが、63億円を支払った段階で書類の偽造などが発覚して、土地を取得できない事態に直面していた。

折しも、不動産業界では所有者になりすまして無断で土地の売買をする「地面師」が跋扈。

この五反田の物件も一部では「いわくつき」と噂されていただけに、不動産のプロである積水ハウスの幹部たちがそれを見抜けなかったことを和田会長は問題視した。

「和田会長の号令のもと、原因究明のための『調査対策委員会』なるものを設置すると決めたのが7月20日の取締役会直後のことでした。その調査委員会の報告が出てくると、和田会長は現経営陣の責任を認識するようになった。

阿部社長には土地問題の責任を取って退任してもらい、若い経営陣に刷新しようと考え始めた」（前出・関係者）

もともと阿部社長は、和田会長が社長時代から経営企画担当役員として仕えてきた側近中の側近。

'08年に和田会長から後継指名されてからは、和田会長が会社の事実上トップである最高経営責任者（CEO）としてグループ全体のかじ取りをする中、阿部社長は最高執行責任者（COO）として「和田体制」を支えてきた。積水ハウスの内情に詳しい人物も言う。

「業界の中には、阿部社長のことを和田会長の『腰巾着』と揶揄する人もいたが、裏を返せば阿部社長はそれほどまでに忠誠を尽くしてきた。業界のカリスマである和田会長の後ろに控えながら、約10年にわたって積水ハウスの本業である住宅部門を支えてきたわけです。

そこまでしてきたのに、和田会長が自分を切ろうとしていることを知ったときの阿部社長の心境は推して知るべし。昨年末くらいから二人の仲が不穏になっているという話が聞こえ始めた」

多数派工作で負けた

じつは不動産業界ではこうした積水ハウスの内紛劇には「既視感」がある。それは'92~'98年の奥井功社長時代のことで、奥井社長と当時の大橋弘会長が対立。

このときは奥井社長が大橋派の役員を子会社に飛ばす更迭人事を断行したことで内部抗争が表面化したのである。

しかも、その奥井派の中心的存在だったのが、当時若手役員の和田氏その人だった。

「和田氏は奥井氏の指令を忠実に実行する『腹心』そのものでした。奥井氏はそんな和田氏を末席常務から専務に抜擢するなど引き上げて、自分の後釜に据えた。

和田氏は営業一筋で、入社5年目の28歳で最年少の営業所長に登用されるなど実績は抜群。若いころから社長候補と目されてきたが、最終的には奥井派の先兵として活躍したことでトップの座を確実なものにしたと言われた」（在阪記者）

そんな文字通りの「実力派」である和田氏が今回は内部抗争に敗れて辞任する羽目になったのだから、業界関係者の間には余計に衝撃が走っているわけである。

あるライバル社幹部は、「今回は和田氏の慢心がアダになった」と指摘する。

「和田氏は社長時代も含めるとすでに20年近く積水ハウスのトップに座っているため、普通の会社であれば老害扱いされてもおかしくない。

しかし、積水ハウスで初の生え抜き社長としてプロパー社員からはスター扱い。そのうえ、酒好きで豪快な人柄で、社内はもとより業界でもファンが多い。

それだけ長くカリスマとして君臨してきた和田氏からすれば、今回自分が提案する人事案に反対する者はいないとの楽観があったのでしょうか。

そこへきて、最近の和田氏は海外市場開拓のトップ外交で世界中を飛び回っていたので、本社の役員フロアでなにが起きているのかを察知できなかったフシもある。結果的に、多数派工作で負けたということに尽きる」

次なる闘争の火種

和田氏不在のスキを見計らって、阿部氏が「こっちの水は甘いぞ」と自陣拡大工作をしていたかどうかはわからない。ただ、今回の地面師問題の責任を押し付けられてはたまらないという事情があったことは確かだ。

「仮に土地問題の責任を取って辞任すれば、取締役としての善管注意義務違反で損害賠償を請求される可能性が出てくる。

しかも、今回は損失額が数十億円に達しているので、その巨額を役員個人が請求されたら最悪の場合は個人破産に追い込まれかねません。

実際、会社側は今回の責任問題について、昨年12月に法務部長、不動産部長、マンション事業本部長の3人の職を解くことで処理はすべて終わったということにしている。

それと同じ文脈で、今回の社長交代人事も『土地問題とはまったく関係がない』と強調しているわけです」（前出の内情に詳しい人物）

副会長の稲垣氏も自分たちは「被害者」であることを強調するかのようになり、次のように語っている。

「今回の事件の言い訳をするわけじゃないですが、巧妙な手口の詐欺にあったわけです。マンションの土地を買うかどうかは経営上の判断なので、それだけで辞任をするとか、解任になるという要件には該当しない」

しかし、和田氏からすればそんな無責任な態度を取る経営陣がどうしても許せなかった。だからこそ、1月24日の取締役会で土地問題の責任を取る形での辞任を社長に迫ったが、返り討ちにあってしまったわけだ。

その後、取締役会で会長解任の提案がなされたかどうかは「守秘義務」。ただ、会長解任の賛否をとった上で、「みずから辞任したらどうか」と追いこまれていた——そう指摘する向きもある。

「(和田氏は) 追いこまれたわけではない。いろんな話があったうえで、会長が自分で判断され

たということです」(稲垣副会長)

2月21日、和田氏は東京で業界団体の会合に出席し、「なにか」を語るとの情報が駆け巡った。しかし、直前になって体調不良で欠席した。

「和田氏は仲井氏が新社長に就くことには異論はない。ただ、新経営陣が報復として和田氏のかわいがってきた部下たちを放逐することを懸念している。

すでにその空気を察知したようで、『このままでは会社が大変なことになる』と日経のインタビューにも応じたようです。ここからは和田氏がみずから動くのではなく、和田派の中堅幹部が立ちあがるとの話も浮上してきた」(前出・在阪記者)

この騒動はまだまだ収まりそうにない。

注1：1月の取締役会では阿部氏・稲垣氏・仲井氏が代表取締役となることが決議された

注2：解任された前会長がクーデターだと言え、会社側はそもそも解任ではないと火消しに回る。時価総額で1兆円を超える有名上場企業の「奥の院」でなにが起きているのか。当事者が本誌に語った。「最後は会長がわかった、と」

注3：和田氏は日本経済新聞に対し「事実の隠蔽はよくない」とした。

注4：ここまで支えた俺を切るのか？

注5：「なんであのような話をされたのかは、僕に聞かれてもわかりません」

注6：多数派工作で負けた

注7：次なる闘争の火種

注8：五反田の問題の物件